

同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み（1）

——大学生による小5時代の回想から——

藤原正光*

Pilot Study on Construction of Conforming and Social oriented Behavior Scale, Its Reliability and Validity(1) from the recollection at the time of the 5th grader in an elementary school by the college students

Masamitsu FUJIHARA

要旨：社会化と個性化の発達の測度として同調行動志向尺度と個人行動志向尺度の作成を試みた。大学生233名を対象に、小学5年生時代を回想して「当時の自分に合っている」度合いを、それぞれの項目ごと5件法で評定させた。両尺度ともに14項目を分析の対象とした。同調行動志向尺度では、因子1（友だち関係 4項目）、因子2（学校・流行 5項目）、因子3（家族関係 5項目）の3つの因子が抽出された。個人行動志向尺度では、因子1（友達関係 5項目）、因子2（家族・学校 7項目）、因子3（流行 2項目）が抽出された。両尺度を比較すると、平均尺度得点は、同調行動尺度 > 個人行動尺度の関係が、両尺度間には負の相関が有意に認められた。個人の判断場面の状況認知の違いにより同調・個人行動の質の違いが生じていることが示唆された。

伊藤美奈子（1993¹⁾、1995²⁾）の個人志向性・社会志向性PN尺度から構成概念の妥当性が検討された。同調行動志向尺度と社会性尺度（伊藤）、個人志向尺度と個人志向性（伊藤）とにそれぞれ正の相関が、同調行動志向尺度と個人行動志向尺度および個人志向尺度（伊藤）との間に有意な負の相関が得られた。

Cronbachの信頼性係数より両尺度の3因子の信頼性および級内相関係数が算定され、それぞれ有意な独立した「1まとまり」であることが確認された。

小学生を対象とした調査の必要性、構成概念の妥当性や再テスト信頼性の更なる検証など、今後いくつかの課題を残した研究結果であった。

キーワード：同調行動志向 個人行動志向 尺度構成 テストの信頼性・妥当性 個性化・社会化

問題

「個と集団」の問題は古くて新しい社会心理学の課題である。私たち一人ひとりの人間は、家族や学校や地域社会のさまざまな集団の中で生活し、自分らしい自己を形成しながら人間としての成長を遂げている。この成長の過程で、はからずも周りの集団と上手く適

応できず、精神的な障害を被ってしまう者もいる。このような人間のこころの発達と社会との関係を測る尺度として、堀洋道ら(2001)³⁾は「心理測定尺度集」を刊行した。過去10年間に発表された心理尺度のうち、日本語の質問形式であること、信頼性や妥当性が検討され、将来的に有用であると考えられる、などの採択基準を設け約150の心理尺度を紹介している。この著書の構成は、第1部 人間の内面を探る<自己・個人内過程>、第2部 人間と社会とのつながりをと

*ふじはら まさみつ 文教大学教育学部心理教育課程

らえる〈対人関係・価値観〉, 第3部 心の健康をはかる〈健康・臨床〉から成っている。これは, まさに, 個人と社会との関係を探ろうとする試みが, 現代の社会心理学の主流の1つになっていることを裏付けている。

同調行動の研究は, アッシュ (Asch, S.E. 1951)⁹⁾の古典的研究以来, 数多くの実験的研究がグループダイナミックスの領域で行なわれてきた。同調行動とは, 「自分とは異なる意見・態度・行動を周囲から求められたとき, 迷いながらも周りの意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」と定義することができる。一般に, 同調行動は内心から他者の意見や行動を受け入れる「内面的同調」と, 表面的には同調しているように見えるが内面では異なる「表面的同調」とに分けることができる。いずれにしても, 自分の判断をする際の「こころの葛藤(悩みながら)」が同調行動の根底にあるメカニズムといえる。同調行動は社会生活を営む上で欠かすことのできない行動様式であり, 社会的行動の下位概念と捉えることができる。これは, 現代社会で重視されている創造性や個性とは逆の概念であるといえる。

周囲と同じような態度や行動を求める社会にあって, 自分の価値観や信念に基づいた行動や態度を維持することは, 多くの人にとって望ましい・憧れの姿である。自分らしい生き方の研究は, ゴルトシュタイン (Goldstein, K.) やマズロー (Maslow, A.H.) やロジャーズ (Rogers, C.) らの自己実現の概念研究にとどまらず, 近年, 自己主張スキル・トレーニング (アサーション) 研究へと発展している研究領域である。

このように, われわれの現代社会では「社会の規範に従った生き方を求める一方で, 自分らしい生き方を求める」という, 一見相反する人間像が求められている。本研究は, このような両極端の社会的動機がどのように形成され, 発達するのかを研究する第一歩とし

て位置付け, 心理尺度作成を試みている。

最近の「社会化」に関する研究として, 菊池彰夫・堀毛一也 (1994)⁹⁾の社会的スキルに関する研究, 伊藤美奈子 (1993, 1995) の個人志向性・社会志向性PN尺度の研究を挙げることができる。本研究では, 伊藤の「個人志向性・社会志向性PN尺度」の研究をベースに同調行動志向尺度・個人行動志向尺度の形成を試みている。

伊藤 (1993, 1995) は, 人格発達や適応の過程で個人が重視する基準を, 個性化を目指す「個人志向性」と社会化を目指す「社会志向性」に区別し, 肯定的(適応的)状態を測定するP尺度を17項目, 否定的(不適応的)状態を「個人志向性」尺度の部分で測定するN尺度として17項目提案している。P尺度は, 中・高・大学生を対象に, N尺度は大学生を対象に尺度構成されている。調査対象者は, 中学生149名, 高校生234名, 大学生327名, 計710名であった。

P尺度のクロンバック (Cronbach) の信頼性係数は, 社会志向性 = .76, 個人志向性 = .69であり, 大学生99名を対象に行った3ヵ月後の再テスト信頼性係数は, 社会志向性尺度 $r = .74$, 個人志向性尺度 $r = .68$ であり, いずれも有意な相関を得ていた。N尺度の信頼性係数は, 社会志向性・個人志向性ともに = .71であった。P尺度の構成的妥当性は, 自意識尺度 (菅原, 1984)⁹⁾と東大式エゴグラムとの関連から検討されている。その結果, 私的自我意識とは社会・個人志向性ともに正の相関が, 公的自我意識とは社会志向性が正, 個人志向性が負の相関を示していた。エゴグラムとの関連では, 社会志向性はNP (養育的親) と正の相関が, 個人志向性はA (大人) と正の相関が得られた。MPI尺度を用いたN尺度の構成的妥当性は, 両志向性とも神経質得点と正の相関を示していた。

この伊藤 (1993, 1995) の研究は, 個人の人格発達や適応を, 個性化と社会化の視点か

ら尺度構成している点やテストの信頼性・妥当性を厳密に検討している点は高く評価できるが、さらに状況要因(日常生活の葛藤場面を含む)に配慮した個性化・社会化の検討の余地が残されていると思う。

本研究の主な目的は、日常生活場面、具体的には「葛藤を伴う判断を求められる場面」での行動形態から個性化・社会化を検討できる尺度を形成することにある。伊藤のPN尺度の社会志向性に対応する概念として同調行動志向を、個人志向性に対応する概念として個人行動志向を提案している。具体的には、同調行動志向尺度・個人行動志向尺度を作成し、両尺度の構成的信頼性および妥当性を伊藤(1993, 1995)の個人志向性・社会志向性PN尺度を用いて比較検討することにある。

また、個性化・社会化の形成過程を発達的に検討するために、近々小学生と大学生の横断的な比較研究を実施する予定である。本研究の調査対象者は大学生であり、小学生を対象とした研究の基礎(パイロット研究)と位置づけている。

方法

- 1) 調査対象者: 大学生233名。
- 2) 調査期間: 2006年1月中旬, 埼玉県内の大学の教育心理学, 学校カウンセリングの授業中に実施した。
- 3) 調査内容: アンケート調査法であった。対象者は大学生であり, 小学5年当時を回想して回答する回想法形式であった。同調行動志向(23項目)と個人行動志向(23項目)に「あてはまる気持ちの度合い」を5件法で評定させた。

また、作成したテストの妥当性を検討するために伊藤のPN尺度(1993, 1995)を併せて実施した。この尺度では、各項目内容に「あてはまる気持ちの度合い」を5件法で回答させた。社会性志向尺度(16項目)と個人志

向尺度(14項目)であった。

結果と考察

1) 同調行動志向尺度

(1) 同調行動志向尺度の因子分析

因子分析(主因子法, バリマックス回転)により, 当初設定した23項目から14項目を分析の対象とした。その際, 因子抽出後の共通性得点(0.484 ~ 0.701)と抽出された3因子の項目数(できる限り均等になるように配慮)とを考慮した。選択された項目内容は, 学級活動, 日常生活, ルール, ゲーム, 家族, 手伝い, 食事, 流行に関するものであった(表1, 表2参照)。

3個の因子が抽出され, 因子1を「友だち関係因子」, 因子2を「学校・流行因子」, 因子3を「家族関係因子」と命名した。

因子1(友だち関係)は, 項目統計量の平均値の高い順に, 集団スポーツ(3.54), 友だちとの約束(3.40), 友だちの手伝い(3.21), トランプ遊び(2.36)の4項目であり, それぞれの項目間に有意差が認められた($F=78.034$, $df = 3,231$, $p < .001$)。項目要約統計量は, 平均値3.127, 標準偏差0.502であった。級内相関 $r = .224$ ($p < .001$)であり, 因子としての独立性は確認されたといえる。

5件法の間評定値「3」以上を示した項目から判断すると, トランプなどの個人ゲーム以外の友人関係でかなり高い同調行動が認められた。

因子2(学校・流行)は, 項目統計量の平均値を高い順に示すと, いじめの場面(3.39), 学級会・部活動(3.25), 言い争いの場面(2.86), 話題のTV(2.86), 流行・持ち物(2.76)の5項目であり, それぞれの項目間に有意差が認められた($F=17.067$, $df = 4,229$, $p < .001$)。項目要約統計量は, 平均値3.024, 標準偏差0.277であった。級内相関 $r = .199$ ($p < .001$)であり, 因子としての独立性は確

表1 同調行動志向の質問項目

番号	項目内容			
第1因子 友だち関係 Cronbach α =.536 級内相関 r =.224***				
7	自分の時間がなくなっても、友だちの手伝いをしてしまうことがある			
9	友だちとの約束は、後で「理不尽(変だな)」と思っても果たすようにしている。			
11	バレーやサッカーなどの集団スポーツで、友だちのミスで負けても、「くやしい」けれどゆるしてしまう。			
12	トランプ等の遊びで、負け続けている友だちが「かわいそう」なので、勝ちを譲ることがある。			
第2因子 学校・流行 Cronbach α =.554 級内相関 r =.119***				
4	学級会・部活動などで、みんなと意見が違うときには、自分の意見を取り下げる。			
8	「いじめ」の場面を目撃しても、「いけないこと」と思いながらも傍観者になってしまうことがある。			
14	討論の場面で、言い争っている人を見ても、「逆恨みが怖い」ので、仲裁は避けるようにしている。			
22	友だちが、ブランド品・流行の商品などを持っている、自分もほしくなる。			
23	話題になっている TV や漫画・小説などは、見たり・読んだりするようにしている。			
第3因子 家族関係 Cronbach α =.431 級内相関 r =.131***				
15	両親の「もめごと」は、後で「関係が悪くなる」ので、なるべく聞かないようにしている。			
16	きょうだい間の(又は親との)「意見の違い」には、相手の意見に合わせるが多い。			
17	親から「手伝い」を頼まれたとき、面倒でも手伝うことにしている。			
19	食事の種類で、家族と意見が違ったら、家族に合わせてしまう。			
20	家族旅行や一緒の外出には、面倒でも付き合うことにしている。			

注 級内相関係数は単一測定値を使用

*** $p < .001$

表2 小5を想定した同調行動志向・因子分析結果(バリマックス回転)と各項目の平均値・標準偏差

	因子1	因子2	因子3	共通性	平均値	標準偏差
	(友だち関係)	(学校・流行)	(家族関係)			
7)友だちの手伝い	.646	.005	-.031	.552	3.21	1.03
9)友だちとの約束	.572	.024	.175	.565	3.40	0.90
11)集団スポーツ	.552	.062	-.166	.551	3.54	1.12
12)トランプ等の遊び	.566	-.104	.162	.490	2.60	1.09
4)学級会・部活動	.409	.559	.064	.555	3.25	1.10
8)いじめの場面	.149	.581	.026	.484	3.39	1.04
14)言い争いの場面	.442	.449	.127	.611	2.86	1.04
22)流行・持ち物	-.244	.638	-.011	.666	2.76	1.29
23)話題の TV など	-.234	.630	-.059	.701	2.86	1.18
15)両親のもめごと	.127	.313	.411	.498	2.97	1.16
16)家族・意見の違い	.090	.077	.618	.587	2.40	1.19
17)親の手伝い	-.036	-.191	.622	.526	3.26	1.08
19)家族との食事	.283	.053	.595	.583	3.00	1.24
20)家族との外出	-.148	.016	.527	.503	3.44	1.18
因子寄与	1.996	1.861	1.68			
寄与率(%)	14.257	13.291	11.996			
累積寄与率(%)	14.257	27.548	39.545			
因子間相関 I		.157*	.116			
II			.101			
III						

* $p < .05$

同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み(1)

認められたといえる。

評定値「3」以上の項目は、いじめの場面や学級会等での傍観者の態度が示すように、内心とは裏腹な「表面的同調」傾向が多く見られることを示唆している。しかし、比較的気軽に自己主張できる好きなTVや流行などには、あまり同調性を示していないようである。

因子3(家族関係)は、項目統計量の平均値の高い順に、家族との外出(3.44)、親の手伝い(3.26)、家族との食事(3.00)、両親のもめごと(2.97)、家族・意見の違い(2.40)の5項目である。それぞれの項目間に有意差が認められた($F=29.424$, $df=4,231$, $p<.001$)。項目要約統計量は、平均値3.014、標準偏差0.393であった。級内相関 $r=.131$ ($p<.001$)であり、因子としての独立性は確認されたといえる。

評定値「3」以上の項目から判断すると、親

を中心とした家族の結びつきは高く、もめごと以外の健全な関係を強く求めていることが伺える。

(2) 同調行動志向の因子1, 因子2, 因子3の関係

分析の対象とした同調行動志向尺度全体(14項目)の項目平均値は3.049であり、標準偏差は0.372であった。すでに述べたように、因子1(友だち関係)の項目要約統計量は平均値3.127($SD=.502$)、因子2(学校・流行)は平均値3.024($SD=.277$)、因子3(家族関係)は平均値3.014($SD=.393$)であった(表3, 図1参照)。また、それぞれの因子間には、因子1>因子2・因子3の関係が認められた(表4参照)。

同調行動尺度の全体的傾向は、いずれの因子も評定値が「3」以上であり同調的傾向が高いことを示しているが、因子3(友だち関係)

表3 同調行動・個人行動の因子別平均得点

同調行動	平均	標準偏差
因子I 友だち関係	3.127	0.502
因子II 学校・流行	3.024	0.277
因子III 家族関係	3.014	0.393
個人行動		
因子I 友だち関係	2.675	0.324
因子II 家族・学校	2.707	0.190
因子III 流行	3.048	0.300

表4 同調行動・個人行動の因子間の有意性検定(平均値の差)

同調行動	因子I	因子2	因子3
因子I 友だち関係		2.719**	3.154**
因子II 学校・流行			0.477
因子III 家族関係			
個人行動	因子1	因子2	因子3
因子I 友だち関係		2.401*	16.717***
因子II 家族・学校			34.270***
因子III 流行			

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$ 表内の値: t値

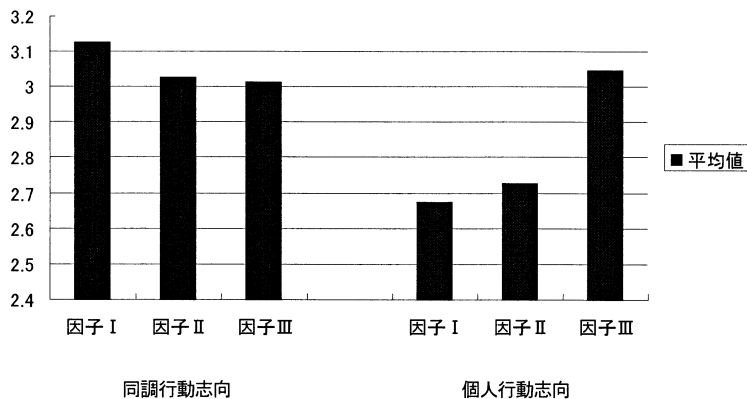


図1 同調行動志向・個人行動志向の因子別平均得点

が最も高い得点である。この結果は、藤原正光(1976)からの、児童期後期から青年期前期にかけて最も同調行動が高くなるとする知見支持するものであった。

2) 個人行動志向尺度

(1) 個人行動志向尺度の因子分析

因子分析(主因子法,バリマックス回転)により,当初設定した23項目から14項目を分析の対象とした。因子抽出後の共通性得点(0.373~0.717)と,抽出された3因子の項目数(できる限り均等になるように配慮)とを考慮した。選択された項目内容は,学級での活動,日常生活,ルール,ゲーム,家庭での生活,流行に関するものであった(表5,表6参照)。

因子1(友だち関係)は,項目統計量の高い順に平均値を示すと,教科の学習(3.15),討論の場面(2.81),集団スポーツ(2.64),い

じめの場面(2.64),友だちの遅刻(2.36)の5項目であり,それぞれの項目間に有意差が認められた。(F=30.054, df = 4,228, p < .001) 項目要約統計量は,平均値2.675,標準偏差0.324であった。級内相関 $r = .247$ (p < .001)であり,因子としての独立性は確認されているといえる。

中間評定値「3」以上を示した項目は学習場面だけであり,日常生活での友だち関係は,あまり自己主張的な個人的行動を示していない。

因子2(家族・学校)は,項目統計量の高い順に平均値を示すと,トランプ等の遊び(2.95),友だちの手伝い(2.89),家族・意見の違い(2.80),親の手伝い(2.68),両親のもめごと(2.67),嫌いな食べ物(2.51),家族との食事(2.44)などの7項目であり,それぞれの項目間に有意差が認められた(F=8.450, df = 6,230, p < .001)。項目要約統計量は,平

表5 小5を想定した個人行動志向

番号	項目内用			
	第1因子 友だち関係	Cronbach	$\alpha = .554$	級内相関 $r = .247^{***}$
13	討論の場面で、「自分の考えが正しい」と思ったら、受け入れてもらえるまで粘り強く説得する。			
2	教科の学習では、自分の考えが「正しい」と思ったら、みんなが納得するまで一生懸命説明する。			
11	バレーやサッカーなどの集団スポーツで、友だちのミスで負けたら、今後ミスをしないように一緒に練習する。			
10	友だちが遅刻したら、理由のいかんに関らず、「以後しないように」と注意する。			
8	「いじめ」の場面を目撃したら、「いけないこと」とであると、一人になっても加害者を説得する。			
	第2因子 家族・学校	Cronbach	$\alpha = .531$	級内相関 $r = .178^{***}$
18	食卓に「嫌いなもの」が出たら、食わずに文句を言う。			
19	食事の種類で、家族と意見が違ったら、「自分の意見」が通るように最後まで主張する。			
17	親から「手伝い」を頼まれたとき、理由をつけて断ることが多い。			
15	両親の「もめごと」は、「意見が正しい」方に加勢し、相手を一緒に説得する。			
16	きょうどい間で(又は、親との)「意見の違い」には、相手が納得するまで粘り強く説得する。			
7	友だちから手伝いを頼まれたとき、自分の時間がないときには、「忙しいから後にして」と丁寧に断る。			
12	トランプ等の遊びで、友だちが負け続けても、一人で強くなるために勝ちを譲らない。			
	第3因子 流行	Cronbach	$\alpha = .656$	級内相関 $r = .488^{***}$
22	友だちがブランド品・流行の商品などを持っていても気にならない。自分の趣味に合わせたい。			
23	話題になっているTVや漫画・小説などは気にしない。自分の趣味を大切にしたい。			

注: 級内相関係数は単一測定値を使用した

*** p < .001

同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み(1)

表6 小5を想定した個人行動志向・因子分析結果(バリマックス回転)と各項目の平均値・標準偏差

	因子1	因子2	因子3	共通性	平均値	標準偏差
	(友だち関係)	(家族・学校)	(非・流行)			
13) 討論の場面	.712	.091	.070	.529	2.81	1.04
2) 教科の学習	.707	-.018	.083	.623	3.15	1.06
11) 集団スポーツ	.545	-.115	-.091	.584	2.64	1.07
10) 友だちの遅刻	.542	.150	-.123	.611	2.36	0.95
8) いじめの場面	.498	.121	.238	.557	2.41	1.03
18) 嫌いな食べ物	-.118	.712	-.016	.662	2.11	1.11
19) 家族との食事	.147	.693	-.063	.592	2.44	1.08
17) 親の手伝い	-.075	.607	-.044	.519	2.58	1.06
15) 両親のもめごと	.430	.494	-.070	.486	2.93	1.12
16) 家族・意見の違い	.399	.402	.028	.579	3.10	1.11
7) 友だちの手伝い	.214	.304	.181	.353	2.89	1.03
12) トランプ等の遊び	.117	.310	.301	.600	2.95	1.05
22) 流行・持ち物	-.005	-.059	.826	.717	3.11	1.09
23) 話題のTVなど	-.045	-.079	.832	.701	2.98	1.07
因子寄与	2.292	2.018	1.601			
寄与率(%)	16.372	14.417	11.436			
累積寄与率(%)	16.372	30.79	42.226			
因子間相関 I		.431**	.034			
II			-.063			
III				** p<.01		

均値2.707, 標準偏差0.190であった。級内相関 $r = .178$ ($p < .001$) であり, 因子としての独立性は保障されているといえる。

評定値「3」以上の項目はなく, 特に親を中心に展開される家族生活においては個人行動志向得点が低く, 従順な生活を送っている様子が伺える。

因子3(非・流行)は, 項目統計量の平均値の高い順に示すと, 流行・持ち物(3.11), 話題のTVなど(2.98)の2項目であり, それぞれの項目間に有意な傾向が認められた($F=3.269$, $df = 4, 231$, $p = .072$)。項目要約統計量は, 平均値3.048, 標準偏差0.300であった。級内相関 $r = .488$ ($p < .001$) であり, 因子としての独立性は確認された。

2項目とも評定値「3」に近い得点であることから, 流行に関しては他の事項に比べ自分を表出しやすい傾向が見られる。しかし, 抽

出された項目が2項目であった点は, 尺度の構成的妥当性に問題が残る。

(2) 個人行動志向の因子1, 因子2, 因子3の関係

分析の対象とした個人行動志向尺度全体(14項目)の項目平均値は2.747であり, 標準偏差は0.821であった。すでに述べたように, 因子1(友だち関係)の項目要約統計量は平均値2.675($SD=.324$), 因子2(家族・学校)は平均値2.729($SD=.190$), 因子3(非・流行)は平均値3.048($SD=.300$)であった。(表3, 図1参照) また, それぞれの因子間には, 因子1 < 因子2 < 因子3の関係が認められた。(表4参照)

因子1と因子2の平均評定値は「3」以下であり, 友だち関係や家族・学校では個人行動志向は少ないという結果であった。「自己表出的行動を抑制することにより対人関係を円滑

に保っている。」といえるのであろうか。疑問が残る。トランプ遊び、流行・持ち物、話題のTVなどの項目で比較的高い評定値が得られた結果から、社会からの拘束への圧力(しぼりの強さ)が個人行動志向と関連しているのかもしれない。

(3) 同調行動志向尺度と個人行動志向尺度の妥当性

構成概念妥当性を検討するために伊藤(1995)の個人志向性・社会志向性PN尺度を用いた。その結果、同調行動志向尺度と社会志向尺度(伊藤)との間に正の有意な相関($r = .360, p < .001$)が認められ、個人志向尺度との間に負の有意な相関($r = -0.306, p < .001$)が認められた。(表7参照)

個人行動志向尺度(本研究)と社会志向尺度(伊藤)との関係は無相関であったが、個人志向尺度(伊藤)との間には正の有意な相関($r = .372, p < .001$)が得られた。

したがって、同調行動志向尺度と個人行動志向尺度の構成概念妥当性は、ある程度保証されたといえよう。

表7 同調行動・個人行動・社会志向・個人志向の相関行列

	同調行動	個人行動	社会志向 (伊藤)	個人志向 (伊藤)
同調行動		-.322**	.360**	-.306**
個人行動			-.100	.372**
社会志向				-.406**
個人志向				

** $p < .01$

3) 同調行動志向尺度と個人行動志向尺度の信頼性

(1) 同調行動志向尺度の信頼性

因子1(友だち関係)のCronbachの信頼性係数は0.536であり、単一測定値の級内相関 r は0.224であり、有意な($p < .001$)1つの「まとまり」であることを示していた。因子2(学校・流行)は、信頼性係数 = .554, 級内

相関 $r = .119 (p < .001)$ であった。因子3(家族関係)は、信頼係数 = .431, 級内相関 $r = .131 (p < .001)$ であり、いずれも有意な1つの「まとまり」であることを示していた。

また、3つの因子間の相関係数は、因子1と因子2の間に有意な相関($r = .157, p < .05$)が認められた。この結果は、4)学級会・部活動と14)言い争いの場面の因子付加量がかなり類似していることによると考えられる。

(2) 個人行動志向尺度の信頼性

因子1(友だち関係)のCronbachの信頼性係数は0.554であり、単一測定値の級内相関 r は0.274であり、有意な($p < .001$)1つの「まとまり」であることを示していた。因子2(家族・学校)は、信頼性係数 = .531, 級内相関 $r = .178 (p < .001)$ であった。因子3(非・流行)は、信頼係数 = .656, 級内相関 $r = .488 (p < .001)$ であり、いずれも有意な1つの「まとまり」であることを示していた。

また、3つの因子間の相関係数は、因子1と因子2の間に有意な相関($r = .431, p < .001$)が認められた。

この結果は、15)両親のもめごとと16)家族・意見の違いの因子付加量がかなり接近していることによるものであると考えられる。

今後の展望

個性化と社会化との関連を日常生活の状況要因(学校・家族)を考慮し、葛藤場面での判断から検討している点は評価できる。しかし、次のようないくつかの問題点を含んでいる。

1) 大学生による小5時代を回想した「回想法」による調査研究である。パイロット研究であると位置づけているが、実際の小学生を対象とした研究が望まれる。

2) 伊藤(1993, 1995)の社会志向性・個人志向性PN尺度のみを妥当性尺度として使用し、比較検討しているが、適応・不適応以外の別

の視点から作成された尺度用いて構成概念の妥当性の探る必要がある。

3) 本研究の同調行動志向尺度・個人行動志向尺度とも3つの因子が抽出されたが、累積寄与率は、それぞれ、39.549%、42.226%とかなり低い値であり、説明されていない因子の可能性を探る必要が残されている。

4) 両尺度を検討してみると、学級活動・集団スポーツ・約束・家族関係などに現れる同調・個人行動とトランプ遊び・いじめ・言い争い・流行などの項目に現れる同調・個人行動とは、質的に異なるような気がする。内面的同調と表面的同調などの定義に遡って再検討し、構成概念の妥当性を吟味すること等が今後の課題として残る。

引用・参考文献

- 1) 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 64, pp.115-122
- 2) 伊藤美奈子 1995 個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討 心理臨床学研究, 13, pp.39-47
- 3) 堀 洋道(監修)山本真理子(編)1995 心理測定尺度集 「監修のことば」 p.i サイエンス社
- 4) アッシュ(Asch,S.)1951 社会心理学用語辞典 「同調」p.256 北大路書房 1997
- 5) 菊地彰夫・堀毛一也(編)1994 社会的スキルの心理学 川島書店
- 6) 菅原健介 1984 自意識尺度日本語版作成の試み 心理学研究, 55, pp.184-188
- 7) 藤原正光 1976 同調行動の発達的变化に関する実験的研究 心理学研究, 47, pp.193-201